

# 神戸国際大学 毛丹青教授「日本語応用論」にて講義

2011(平成 23)年 1 月 24 日(月) 3 : 0 0 ~ 4 : 3 0

## <毛丹青あいさつ>

ひとまず坂和先生の話じっくり聴いてください。今日の授業の中で、自分が感動している部分、文章についての質問があれば、どうぞ直接先生に聞いてみてください。パソコンがないので今日は割と雑談のようなこともあります。先生とは中国との関わり、とりわけ映画についてのいきさつのようなことをじっくりと紹介をして頂きながら、皆さんと交流を深めていただけたらと思います。坂和先生は弁護士で、それと同時に映画評論家でもあります。沢山の映画を観にいらっしゃる。私と同じ異色の持ち主でいらっしゃる。僕と何回も中国に行ったり飲んだりした仲間です。ということで、今日は忙しい中わざわざ先生に我が大学に来ていただきありがたいということです。それでは皆さん拍手で迎えてください。

## <坂和講義>

### 第 1 編 坂和からの講義 (3 : 0 0 ~ 3 : 3 0)

#### 1. あいさつ 私と中国語

(1) ダージャーハオ。ウォージャオ・バンハーチャンピン (坂和章平)。一昨年(2009)の4月からNHKのラジオ講座の本を使って中国語の勉強をしています。一昨年(2009)の4月から毛先生がラジオ講座の教科書で見開き1頁で中国の「都市を語る」という記事を書くようになりました。半年間というと、月1回の本だから6回。それを貰ったときに、「俺もぼちぼち真面目に中国語の勉強をやらんとダメだな」ということで、一大決心をして始めました。今年(2010)の3月で丁度2年になります。1年10カ月ほどやってるんですけども、非常に中国の勉強をするのが面白い。電子辞書を使ってノートに書き写していつているんですけど、日本語と同じ漢字がいっぱいあるから、一つの漢字からどういうものをくっつけて覚えていくかと。電子辞書を使う勉強、ラジオ講座を聴く勉強、それからいろんな単語を覚える勉強。そういうことをいろいろやっています。半年毎にテキストは変わるわけですけど、最近(2010)は水野衛子さんという中国映画の翻訳をしている人の「映画で身につく！応用会話」というやり方が私にとって非常に合うスタイルになっています。『初恋の思い出』というのが日本のタイトル。中国のタイトルは『情人結』。趙薇(ヴィッキー・チャオ)とかが出てる映画をとりあげてやっています。これは「応用編」なので大変難しいんですけども一生懸命やっています。もう1つこの『私が愛する中国映画 我愛中国電影』は水野衛子さんが最近出版した中国映画を日本語と中国語両方で説明してる本なんです。自分が観てる中国映画がいっぱい出ているので、こういう本も勉強したいなあと思いながら、まだ全然手がついてません。

(2) 今日は皆さん方が『名作映画には「生きるヒント」がいっぱい！』という私が書いた本を中国語に翻訳してもらい、それを中国で出版するという毛先生の企画が進み出したことを非常に喜んでます。こ

の本は私の一番新しい本です。この前には日本で裁判制度が大きく変わったので、それにあわせて『名作映画から学ぶ裁判員制度』という本を出しました。これはそれに続く第2弾で、映画から生き方のヒントを学ぼうというものです。ハリウッドの映画もたくさんありますが、中国映画で大好きな映画がたくさんある。50作の中に10本以上中国の映画が入ってます。こういう中国の映画からこういうことを学ぼう。こういうハリウッドの映画からこういうことを学ぼう。こういう韓国の映画からもいろいろあるよ。日本でもこういう良い映画があるよということです。ちょっと別の言い方をすると説教じみてる気がしないでもないですが、映画から何を学ぶか。こんな時にはこんな映画を観て、さあ、頑張るぞというようにしたいと思ってこれを作りました。皆さんが日本語に翻訳するについて私が書いてあることがピタッと合うかどうか、「わしはこんな風に思わないぞ」ということもあるかもしれませんが、そういうことは本が出来た後にディスカッションしていきたいと思います。

## 2. 毛先生との出会いと共通点

(1) 今日はいっぱい話したいことがあるんですけど、まずは、2008年3月に毛先生と知り合ったきっかけを紹介します。それは今から約3年前のことです。私の知り合いの留学生で、日本で就職していた女性が旅行関係の仕事をしていた。毛先生が今中国の作家連中を連れて、日本について紹介している。そこで2人を引き合わせたらお互い面白いのではないかということで、初めて知り合いました。その当時も今も私は、裁判所の近くに事務所があって、自宅も歩いて1分のところ。私の交通手段は自転車で、雨が降っても雪が降っても自転車なんですけど、一応スーツを着てネクタイを締めて自転車に乗って「先生、行きましょ」と言ってるので、「このおっちゃん面白そうやな」と彼が思ってくれたらしいです。その後いろいろな話をすると、お互い書くことが好きやし、表現することが好き。自分の見たものを自分の感覚、自分の言葉、自分の文章で表現していくことが好きだというのがよくわかりました。彼は、作家なのでそれが本当のお仕事なんですけど、私は弁護士ですから本来は法廷でケンカをするのが仕事。しかし弁護士の仕事でも何が大事かという、書けないといけない、しゃべらないとあかんということで、書くこととしゃべることが基本なんです。そういう意味で、重なり合う部分が非常にたくさんありました。そういうことがきっかけとなって、私が書いている映画評論本についても、是非中国で紹介したい、私が中国で旅行していることも是非紹介したいということがあって、それが『取景中国』という中国語の本の出版で実現しました。この本は毛先生プロデュースで、元々の文章は映画評論がいっぱい載っている『シネマルーム』とホームページに載っている旅行記がネタです。それをうまく短くまとめて、出版社が持っている写真をいっぱい使って、上海で出版することができました。上海ではブックフェアを毎年夏にやってるんですけど、2009年8月のブックフェアで、中国語で出版することができました。

(2) 毛先生はもともと「日本在住20年、日本をよく知っている中国人作家」というのがうたい文句だったんですね。知り合った時は彼が日本に来て22年くらいだったと思います。私と知り合ってから一緒に活動する部分が少しできたわけです。彼が中国の作家の人たちを呼んで日本を紹介する、そのような活

動がどんどん広がっていく、日本も中国の観光客をたくさん受け入れようとして日中の友好、観光交流を深めていこうという中で、彼の役割も非常に大きくなっていったわけです。日本のマスコミも非常に注目した。日本に来て二十数年の作家としての活動、日本を紹介するという活動の延長線として3年前に彼が神戸国際大学の先生として招かれることになったわけです。もう1つは、彼の中国でのブログが広がりマスコミ関係、メディア関係でいっぱい活動してるということがあって、上海のテレビに出演してくれとかCCTVで彼の特集をくむとか、そういう活動が広がりました。丁度私と毛先生のつながりが出来た頃から、それが急速に広がっていった。そういうことがあって、『取景中国』を出版した時も、CCTVが彼を密着取材してるというタイミングだったので、私もCCTVに1分だけ出ることができました。毛丹青先生と知り合ったおかげで私も面白い活動がいっぱい出来てると思ってます。そういうことで、今日は皆さんが私の『名作映画には「生きるヒント」がいっぱい!』を翻訳してくれてると。それについてのディスカッションをしたいと思います。

### 3. レジメその1、自己紹介と日中65年の歩み比較

(1) 今日は皆さんに3枚ほどのレジメを配りました。これは2007年の10月に北京電影学院で私が3時間くらい講義した時のレジメです。『シネマルーム17』は中国映画特集のパート2で、『シネマルーム5』が中国映画特集のパート1です。この2冊に、中国映画が150本くらい載ってます。北京電影学院の先生をしていた私の知り合いが、美術学部で今でこそ3Dがどんどん出てますけど、その3Dの研究をしていたわけです。日本のアニメを中国で紹介するという活動もやってました。そこで北京電影学院で講義してくれと言われたため喜んでやったわけです。その時、自分がなぜ映画が好きなのか、特になぜ中国映画が好きなのかを北京電影学院の美術学部の学生約50名にお話ししました。これはその時のレジメです。

(2) 1頁は私の自己紹介を書いています。1949年生まれ、つまり中華人民共和国の成立した年と同じ生まれということで、それも何かの因縁かなと思ってます。今年は2011年ですね、北京オリンピックを2008年にやって、2010年には上海万博をした。皆さんが生まれたのが1990年ぐらいで、1980年代いわゆるバーリンホウよりは新しいわけですね。1990年生まれの人が今20歳になってるわけですね。1990年から2010年までの20年。日本では1970年に大阪万博が開かれたわけです。私が大学入ったのが1967年で、71年まで4年間大学生活を送りました。この70年前後の日本というのが一番前向きに発展していた、これからどんどん経済も強くなります。戦争が終わったのが1945年ですから、戦後の復興が終わってこれから日本が豊かになっていくぞという年が1970年ですね。1970年の豊かな時代から、1990年まで20年間発展してきたわけです。ところが、1990年頃に不動産バブルがはじけた。不動産バブルがはじけて、日本は急に下降し始めた。いわゆる「失われた10年」というのが日本に起こるわけです。今や「失われた10年」が2010年まで「失われた20年」という形で続いている。それに対して中国は1978年から改革開放政策が進んだ。毛沢東の時代の19

66年から1977年までの「文化大革命」の頃には中国もかなりダウンしたけども、1980年代からは経済成長してきた。ちょうど日本が1970年から1990年まで発展した20年間と、1980年から今日までの30年間の中国の発展。それが時期がずれて重なっていていると思います。

(3) 1949年生まれの私は2011年の1月で62歳になります。大学卒業までの20年間、大学を卒業して弁護士になり日本が経済成長していく中でどんどん自分も弁護士としていろんな活動を広げていって、お金もたくさん入ってきた20年間、日本が失われた10年に入った1990年から今日までの20年間。私の60年の人生も、20年、20年、20年と区切られるわけです。毛先生も中国で二十数年間、大学卒業して社会科学院とかの仕事をしていた。それから日本に来て二十数年。彼の場合は25年の区切りかもしれないけど、彼も大学の先生をやるようになって、CCTVに出るようになって、これからの20年間は毛丹青の花開く一番大きな時代になるんだろうなと思います。

(4) 皆さんは今20歳から25歳。大学を卒業した後、さあどんな人生が開けてくるのか。日本でもアリ族の話は有名です。日本でも大学を卒業しても就職先がない、中国でも大学を卒業しても就職口がない。そういう問題点はいろいろあるけれども、人生は自分で切り開いていかなきゃならないと思います。そういう時、自分がどんなことから何を学ぶのかというテーマがいっぱいあるわけですね。その1つとして、映画から学ぶものもいっぱいある。私が書いた映画評論から、そういうことを学ぶことがいっぱいあると思います。自分が生きているというのは、今この瞬間を生きているわけだけでも、私は今まで生きてきた60年間を、20年、20年、20年という分け方が出来るわけです。皆さんも以前は中国にいた、そして日本に来て今こういう立場になっている、さあこれからどうするんや、ということを考えて自分の人生を作っていかなければならない。私の話が1つ参考になれば嬉しいなと思います。

#### 4. レジメその2、坂和的映画評論の特徴

(1) レジメの2頁に、坂和的な映画評論の特徴を書いています。第1には弁護士としての視点を入れているのが非常に大きな特徴です。これは、やっぱり俺しか書けない映画評論だと。世の中には映画評論家がたくさんおるわけです。しかし俺は弁護士としての立場で観てるから違うんやと。特に裁判ものとか法的な視点の必要な映画について、俺の評論の面白いところというのが特徴です。

(2) もう1つの特徴は、都市問題的視点というものです。私は弁護士になって10年後からずっと大阪の阿倍野の裁判とか大阪駅前の裁判とか、都市計画とか再開発とか区画整理とか、日本の弁護士にとって非常に苦手な分野になぜか興味を持ってやってきました。1980年代からやりました。都市問題、都市計画に関する裁判をやり、都市計画についての本を書いてきた。それが一番の自慢のタネです。そういう分野では難しい本をいっぱい書いているし、難しい裁判もいろいろやりました。そういう法律論からみた都市計画の問題もあるんやけど、今中国でもまちづくりどうするんやという問題があります。北京でも上海でもすごい高層ビルができた。しかしそれだけでいいのか、日本も東京でどんどん高層ビルができた、地価がどんどんあがった、そしてバブルがはじけた。そういうことがあったわけです。今も中国ではいつ

不動産バブルがはじけるんかという問題点はずっとあるけど、そこは上手くコントロールできているみたいですよ。けど、人間が住むまちをどう作るのかというのはいろいろ難しい問題があります。そういう観点から描かれた映画が、いっぱいあります。『胡同（フートン）のひまわり』とか、ここで言ったらきりがないから言いませんけども、こういう映画はこういう都市問題なんや、こういう観点から観ないといけないんやというのがあります。そういうのが私の映画評論の特徴です。くり返しますと、1つは弁護士の視点、1つは都市問題という視点。それが私の映画評論の大きな特徴です。

## 5. レジメその3、中国電影100年の歴史

(1) 次に皆さんに是非勉強してほしいのが、中国電影100年の歴史です。世界的にも映画が出来て110年ほどですが、中国は清の時代、ヨーロッパに比べれば遅れてたということがあって、映画が本格的に作られたのは、文化大革命が終わった1970年代後半から78年北京電影学院が再開されたところから始まります。戦争中は反日映画がたくさん作られていたけど、本格的に世界に誇れるような映画が出来たのは1978年以降です。陳凱歌（チェン・カイコー）の『黄色い大地（黄土地／Yellow Land）』、張藝謀（チャン・イーモウ）の『紅いコーリャン（紅高粱／Red Sorghum）』、それから、これが1983年、84年、85年辺りからです。これによって中国映画ってすごいやんと世界的に評価された。1985年から考えても、まだ25年なんですよ。中国映画の素晴らしさが知られるようになったのはわずかここ25年なんです。

(2) それを私が知ったのが、『シネマルーム5』を書いた2005年くらいなんですよ。その時の私の教科書が、『中国映画の全貌2000』です。この中国映画を日本に紹介するパンフレットがあって、GWにまとめて20本くらい観た。すごい映画がいっぱいあるなと感心した。そういうことを北京電影学院でお話ししました。ここ25年で出てきた中国映画の素晴らしさというのを是非感じて頂きたい。昔は、心温まる人間味溢れるものが多かった。けど最近、ハリウッド型のCGをいっぱい使った派手なやつが多いですね。昨日も『レッドクリフ』がテレビで放映してました。『レッドクリフ』が悪いわけじゃないけども、ああいう作り方がホントに良いのか、もっと人間の心に迫っていった方が良いのかというのは人によって違います。

## 6. レジメその4、日中国交回復から約40年

(1) レジメの右の方に日中国交回復のことを書いてます。これが1972年ですね。日本と中国の関係は、ここからまだ40年なんですよ。日本では田中角栄、中国では周恩来、この2人がガッチリ握手をした。皆さんが20歳だとすると、ここまでの20年とここからの20年、合わせて40年。そういうものをきちっと歴史的に勉強してもらいたい。その中で映画がどういう風に動いてきているんかということも是非観てもらいたいと思います。

(2) 中国の監督についても資料を付けてます。第5世代監督、陳凱歌と張藝謀が非常に有名ですけども、その後第6世代監督もいっぱい出ている。第6世代監督になると、「俺は俺流で作るよ」と。中国の国内

で「お前の作り方気に食わないって言われたら、俺は勝手に作るわ」という監督も生まれてるわけです。そういう意味では、中国共産党的なやり方がどこまで通るのか、問題があるのかということも含めて、監督の世代論から考えていくと非常に面白いと思います。皆さんは中国のテレビドラマも観てるだろうし、アニメもいっぱい知ってるだろうし、日本の俳優、香港の俳優、韓国の俳優もたくさん知っていると思います。だけど、皆さんが昔の陳凱歌、張藝謀の時代の映画をどれくらい知ってるのか。それを自分で考えながら勉強してもらいたいと思います。

## 7. まとめ

最初に全部話しても仕方ないので、こういうスタンスで私は弁護士の活動をしているし、自分の好きな映画を観て評論を書いているということです。今回こういう出会いが出来たことを非常に嬉しく思っています。『シネマルーム25』の表紙の写真は山東省の都市・威海の定遠号です。日清戦争の時の清国の軍艦の定遠号です。日本では去年、今年と『坂の上の雲』という有名な小説がドラマ化され日清戦争、日露戦争の場面がたくさん出てきました。威海には日清戦争の時代の定遠号が原寸で作られてテーマパークとなっています。皆さんは歴史教育をかなり受けているはずやから、日清戦争についての勉強もかなりされていると思います。しかし日本はそういうことはほとんど知らない。定遠号をめぐるいろんなプロジェクトも、今動いています。それも毛さんと一緒にやりたいなと思っています。皆さんのいろんなご意見、質問を聞きながら今日のお話をしたいと思っています。とりあえず、以上です。

## 第2編 学生からの質問とその回答（3：30～4：20）

### <毛丹青あいさつ>

それでは、前の授業でも何回も言いましたけど、皆それぞれ感動が違うので、自分の感動した部分についての質問を先生に直接日本語で頑張って聞いてみてください。質問を出す前に、頁数があるので、自分が感動した例えば何頁から何頁について、この間の質問票は詳しく書かれていたので、書いてあるものをここで一度話しをしてみれば良いと思います。折角の機会なので是非これを使ってください。発言したい人は挙手してください。遠慮せずに頑張ってやってみてください。ぶつかってみてください。1番、誰か手をあげてやってみてください。

坂和) 日本人はなかなか手を挙げないけど、中国人はすぐ手を挙げると私は経験上思ってるので是非どうぞ。

毛先生) 我々何回もそういう経験ありましたから。中国の学生は質問に皆すぐに手を挙げるんですよ。しかし今日はちょっと様子が……。いつもはパソコンでやってるから。今日は手ぶらだから。第1番誰か質問やってみてください。

### <質疑>

## 1. 男子学生A)『おくりびと』について

坂和)

『おくりびと』という映画を観た人は？モントリオール世界映画祭で賞を貰ったということで有名になったんだけど、この『おくりびと』という映画は知らない人も多いと思います。日本では人が死んだ場合に、もちろん中国でもそうですが、死体をきれいに拭いて、きれいに化粧して、服を着せて棺に納めるということをしています。『おくりびと』以外にも、殺人事件でボロボロになった死体について、その人のお葬式や、自動車で引きずられてあっちこっち傷ついて死亡したと、そういった事件もあります。ボロボロになった死体は当然回収されるわけだけでも、その人の家族の人たちがお葬式を挙げるについて、いくらなんでも頭がぐしゃぐしゃになってるわ、腕は無くなってるわ、足はどうだわと。それをビニール袋に詰めてボンというわけにはいかない。さあ、それをどういう風にきれいにするか。これは大変な仕事なわけなんです。特に犯罪関係の死体となると、弁護士の視点からいうと司法解剖とかもあります。車でひかれた場合には、どこでひっかけられたとか、この傷はどこでついたんやとか、何メートル引きずっていったんやとか調べないといけないから、司法解剖をしないとイケない。それは切り刻むということやから、それはそれで大変なことなんです。『おくりびと』の場合は、そこまでの厳しい話ではなく、お葬式を挙げるについて、きれいに化粧するという仕事に主人公がついたわけですね。皆さん、今就職難だと言ってもね、坂和葬儀社で日本円で給料20万円あげるよと言われて来ますか？やりますか？やる人手を挙げて。

## 2. 女子学生B) やります。

坂和)

やる？それはどうしてですか？

(1) 確かに彼女のおっしゃるとおりなんですけど、でもやっぱり臭いやん。死体拭いた同じ手で、餃子食べられるかと。そう思うのが普通の人間の感覚ですよ。医学部に行ってる人たち、私の同級生でもお医者さんになってる人は死体を触るのは当たり前やからなんともないけど、私ら弁護士は弁護士になる前に司法修習というのがあって、その時死体の解剖とかに授業として立ち会わなあかんのですよ。そうすると血に強いやつもおるけど、私は血に弱いから、匂いとかに「おえっ」となってなかなかついていけない。生理的にダメなわけですね。理念としては、価値観とすればそういう仕事は大切なんやけど、実際自分がやるかという、俺はどちらかという、辞めたいと思うわけです。この映画は、そういうところを問題として示してるということですね。彼はチェロ奏者としての能力を持っているんだけど、日本のバブルがはじけて楽団が解散になった。仕事がないわけです。そこで何かいい仕事ないかなと探していたら、たまたまそういうところで、半分騙されたような形で、給料これだけやるから、はいあそこ行けと言われて行ったわけです。彼には妻がいるわけやけども、妻に「僕就職決まったよ。坂和葬儀社にいて、給料20万貰うことになったよ」と言うことができない。なぜかと言うと、彼女が嫌がるのがわかってるからです。

「まあ、適当に良い就職先見つかったので僕頑張るよ」と言って、妻に黙ってその仕事を続ける。ところが、あるところでそれがバレたら、妻の対応の仕方がどうやったか。今までは仲良く肩を抱きあっている話をしていたのに、急に「汚らわしい、触らないで」って妻が反応したんですね。そういうのを考えれば、それはおかしいでしょってことやけど、人間の気持とはそんなもんだと。いろんなことがエピソードとして出てくる中で、最後は納棺師という仕事でこういうことをするのは素晴らしいことなんだと言っています。ある意味、きれいごとの映画なんですけどね。納棺師という仕事があるんやということを、初めて世に知らしめた映画として非常に価値があります。

(2) それと、作り方が日本の映画なんで割とおとなしい。それから綺麗。音楽も上手く作っているということで、日本よりも外国で受け入れられた。日本的な、神秘的な雰囲気があったと思うんですよ。そういうことによってモントリオール世界映画祭で賞を貰って、日本に戻ってきて、またヒットした。最初日本で上映した時は、たいしたことなかったんですよ。興行収入というのがあって、だいたい最初の段階で30億円くらい。まあ、それなりにいった。ところがモントリオール世界映画祭で賞を受けて日本に戻ってきて評判になって、80億円くらいになった。今までの倍以上観客が来たということになります。日本の映画が日本よりもむしろ外国で評価された。それはなぜならば、日本的な雰囲気が非常にあった。問題提起もハードではなく、小綺麗に問題提起をしていた。見方はもちろんいろいろあるんやけど、あなたはどんな仕事を選びますか、どっちかと言うと、この仕事よりあっちの仕事の方がいいなと誰しも思うのですが、彼女のように私がやらなければと思えるかどうかですね。

毛先生) 他の人もどうぞ手を挙げて質問してみてください。折角ですからどうぞ。

### 3. 男子学生C) 同じく『おくりびと』について

坂和)

(1) どうすればいいのかは、一人一人が考えて決めることやと。映画というのはあくまで作り物だから、良い形で終わってるわけですね、この映画自体はね。現実には多分、8割方は恋人から言われ、友達からも言われて、他に仕事がないと仕方がないということかもしれないけど、他に同じような給料貰える仕事があったということになれば、10人の内8人は辞めてこっちへ行くよということになるだろうと。現実にはね。

学生)

(2) そういう意味では、もっと突き詰めていけば、今でも日本の社会では、例えば皆さん、家庭ゴミ出しますよね、ゴミの収集車がありますよね。車が来てグルグル回りながら、おっさんらがビニール袋をポーンと放り込んでやってるわけですね。あれは、きれいな仕事じゃないわね。匂いもつくし。やりますか？

女子学生) マクドでやったことがあります。

(3) 日本では昔から差別があるわけです。もっとわかりやすく言えば、日本が戦争をしているときには、俺たちは日本人だ。お前は中国人だ。お前は朝鮮人やと。だから犬のように働け、とやっていたわけです。



昔のローマ帝国の時代にも奴隷という制度があった。そういう身分の差というのがあったわけです。日本でも、職業についての差別というものが暗黙の了解となっているわけです。そのこと自体は良くない。しかし現実にはそういう問題はあるわけです。これが良い仕事で、これが悪い仕事というのを誰がどう決めるんかは非常に難しいです。お医者さんはある意味皆から社会的尊敬を受けている。勉強もたくさんしてる。お金もたくさん貰ってる。だからお医者さんというのはすごい。すごい地位なんだ。しかし考えてみたら、お医者さんだって大変よ。歯医者さんだって、毎日毎日歯見てね、こんな仕事ほんまにやりたい？ そんなこと言ったら、弁護士だって、殺人したやつを弁護して金貰ってるんちがうか、と言われたら、そういう面もあるわけですね。警察官だって、犯罪を守るために頑張ってるんだと言ったら、朝から晩まで動き回らないとあかん。いつピストルで撃たれるかもわからないということですよ。そういう意味で、どんな仕事が良い仕事かと言うのは難しい。楽しんでお金を稼げる仕事が良いのか。社会的な役割を果たせるのがいい仕事なのか。そういうことは人それぞれが価値観を決めていかないといけないわけですね。そういうことをいろんな映画から学ぶことができるでしょ、というのが私の考え方としてあります。

**4. 男子学生D) 日本の教育システムよりアメリカの教育システムの方が良いと思いますか？日本の教育システムには誰かに聞いたら教えてくれるというような良いこともある。誰でも一人じゃ無理なこともあると思うから、誰かに聞いたら教えてくれて、そのことを解決できたらそれも一つの良い経験だと思うが、先生は日本の教育システムを否定するのですか？**

坂和)

(1) 非常に大きなテーマで、一言二言で説明できるものじゃないんですけどね。私が思うのは、今の日本の教育システムは、戦後65年のもの。私が中学校・高校で受けた教育は、愛媛県松山市という地方都市なんですけど、中学高校、男ばかりの6年間の教育。私立でエリート学校で、大学受験のための学校。そういうのがその頃から出来てきたわけです。私はその学校の9期生だから、その中学高校ができてから9年目なんです。その頃の日本というのは、戦争に負けて国全体が貧乏だと、そこから何とか立ち直っていかなければならないというのがあって、教育に一生懸命力を入れようとしたわけです。ところが、その後今日まで続いている日本教育の一番の問題は、いわゆる日教組。これは先生たちの組合ですね。日教組教育が日本の教育のキーワードになっています。それって何なの？ というと、戦前の詰め込み教育とかエリート教育を否定する。戦後のアメリカの自由な自主性を尊重した教育が必要なんだという理念なんです。それは悪くはない。しかし結果として今考えると、ゆとり教育ということになって、土曜日は全部休みだよ、1週間これだけでいいんだよ、それから競争してはダメなんだよ。つまり競争するということは、出来の良いやつと出来の悪いやつを生むと。出来の悪いやつが生まれると、これは可哀相やと。だから競争をしては駄目よということにだんだんってきたわけです。

(2) 毛先生と一緒に中国に行った時に話したのですが、日本では運動会があります。どこでも皆さん一緒ですけど、かけっこをすると、一等賞、二等賞、三等賞、四等賞。私たちの小さい時には、勉強は出来

ないけども運動会では俺が強いんやというやつがいて、鼻たらしながら俺が一番やとやってたわけです。逆に勉強は出来るけど、運動会になるとぜんぜんお呼びがかからないという人もおったわけです。もちろん、運動もできるわ、勉強も出来るわという人もいたわけで、それが一番女の子にもてたわけです。とにかく、いろんなタイプがいるにもかかわらず、いつの頃からか競争を否定する。だから、運動会で一等賞、二等賞をつけるのが駄目だということにだんだんなりました。お弁当なんかでも、お金持ちの家は家族が来て、お母さんがお弁当を持ってきてくれている。ところが、片親のお母さんしかいない、お母さんも仕事でなかなか来れない。その人は一緒にお弁当食べられない。だからみんな一緒にしたら可哀相やないかということで、ごまかしてしまう。そういう教育にだんだんなってきた。私が今言いたいことは、戦後の日本の教育はだんだん競争をなくしている。みんな同じように教える。悪い人がいても悪いといわない。そういう状況について、私は否定的な見方をしています。

(3) 逆に、アメリカというのは元々民族がたくさんある。もちろん白人、黒人という問題もある。自由な国で、自由主義の国です。自由な国というのは儲ける自由もあれば飢え死にする自由もある。飢え死にしても知らん。それがアメリカの社会ですね。中国では、1949年に新しい国ができました。そこで中国はこういう風に作っていきますという大きな方針が決まった。文化大革命の時に大きな混乱が起こったけども、改革開放政策の中で中国共産党が政治を面倒みる。それと同時に、経済については今までの社会主義経済ではなく資本主義経済を取り入れるということになったわけですね。その中で中国のここ40年の動きは、経済活動が政治と結びつくという面はありますけども、経済活動をやっていくことによって儲ける人が出てくる。そこに競争がある。その競争は基本的に必要なんだという捉え方が中国ではされてます。韓国はもっとすごい競争。最初から競争やということでやってます。どちらが良いのかについては当然いろいろあります。しかし今の日本のあまりにも安易な教育、あまりにも競争なしの社会、これでは日本は成り立たない。今の日本では「内向き志向」というのがあって、留学に行く人がどんどん減ってる。お友達だけで一緒にご飯を食べて、そこだけで話をする。外の人と話をするのはうっとうしいから嫌や、となってきた。そういった意味で、日本の今の教育に私は否定的です。アメリカの競争社会の方が好きだし、中国や韓国の競争社会の方が好きです。その方が刺激があるから。今の私の感覚はね。

毛先生) もう1人どうぞ。積極的に手を挙げて聞いてみてください。

## 5. 男子学生E)

坂和)

皆さんが日本に留学してくるについても、かなりの競争を勝ち抜いてきてるわけでしょ？どうですか？だいたい皆さん一人っ子でしょ？今日の新聞にも出てますが、日本は少子高齢化が進んでいます。今私は62歳、団塊の世代です。日本の人口は1億2000万だけでも、極端な話こんな形になってるんです。20代の人がこれくらいしかいないうえ、生まれてくる人がどんどん減ってきていると。ところが60代、70代、80代がたくさんいるから、これを支えないといけないわけです。とてもじゃないけど、無理に

決まってるやないかと。解決するためにどうしたらいいんやという、戦争でもして上の世代が死んだら、早く解決するんですよ。あるいは災害が来て上の人たちが死んだら解決するんですけどね、なかなかそうはいかない。中国の皆さんは今笑ってるけども、あなた方の中国における少子高齢化も大問題なんです。あなた方が40歳、これから20年先なって、子供ができて、収入もある。ところがその時には、もっと上の世代の面倒をみなければあかんわけですよ。だから、あんまり長生きするのも良いことかどうか問題があるんですけどね。70歳も80歳も90歳も100歳も、皆100歳まで生きてえらいことなんですよ。皆が100歳まで生きて、健康に働いて社会に還元できたらいいけど、基本的に若い人たちが面倒みないといけないんですよ。これが世代問題、人口問題です。一人っ子政策は中国特有の政策としてずっとやってきたわけやけども、良かった点と悪かった点がある。そして悪かった点がこれからたくさん出るんやろなあ。それは皆さん方が自分たちで解決していかなあかと。そういう時代になっていくわけです。自分でよく考えろってことです。

**6. 毛先生) 全体的な原稿は読めてないと思います。自分の部分だけを話題にしてやってみてください。**

**男子学生F) 『善き人のためのソナタ』について**

**坂和)**

(1) 『名作映画には「生きるヒント」がいっぱい!』57頁の『善き人のためのソナタ』というのは、ドイツの映画なんですね。戦争の時日本とドイツとイタリアが三国同盟を結んでいた。アメリカ、イギリス、その他の国が連合軍ということで組んでた。まず、イタリアが負けて、その次にドイツが負けて、最後に日本が負けたわけです。日本は島国でした。そこで、アメリカがどういう風に日本を占領するか、中国がどういう風に日本に入ってくるか、北の方からソ連がどういう風に日本を占領するか。そういう問題があったけども、アメリカが連合軍の中心ということで日本を占領した。それが今日の日米同盟という形になっているわけですね。ドイツはヨーロッパのど真ん中やと。第2次世界大戦だけではなくて、第1次世界大戦の時も負けたわけです。ドイツは負けて、えらい貧乏な大変な状態になった。そこへヒットラーが出てきて、国民を1つにまとめあげたわけですね。そのヒットラーがめちゃくちゃやって、また負けた。そのドイツについては、アメリカ、イギリス、フランスなどの連合国が占領した西ドイツとソ連が占領した東ドイツに国が真っ二つに分かれたわけです。これは朝鮮半島と同じです。ソ連と中国が応援した北朝鮮とアメリカが応援した韓国という形で分かれた。朝鮮動乱という経験をしたわけです。1945年に戦争は終わったけれども、1950年から朝鮮半島ではまた戦争をしたわけです。ドイツでは戦争はなかったけども、完全に東と西に分断されてしまった。ちゃんと歴史的に勉強してほしいのがこの東西冷戦です。アメリカを中心とした西の陣営と、ソ連を中心とした東の陣営、それがいつミサイルが飛んできたもおかしくない、いつ核戦争になってもおかしくない、そういう状態になったわけです。世界的な注目点がドイツの東西分裂であり、朝鮮半島の南北分裂だったわけです。

(2) 『善き人のためのソナタ』という映画は、ドイツが東西に分断されている中で、最終的には1989年の時代が描かれます。これは中国でも天安門事件が起こった年、ソ連でも今までのソ連の体制が終わった年、西ドイツと東ドイツを分けていたベルリンの壁が崩された時です。1989年というのが世界史的に大きな時代区分の年になってるわけです。今から21年前です。その東西ドイツを分断していた壁が崩壊する時代、東ドイツには国家警察がありスパイがおったらあかんと国家的な統制を強めていました。ところが東ドイツでスパイの監視をやっているような人が綺麗な音楽を聴く中で人間の気持ちを取り戻した。そういう映画なんですね。ある意味きれいごとかもしれないですね。人間というのは、いくら上からの命令があっても良き気持ちを持ってんだという安心できる映画です。それがこの映画のテーマです。この主人公はなぜ国のために命令に従ってやってたか。例えば毛丹青が何をしているかを探るために、教室に隠しマイクを置いておく。学校だけじゃわからない。家でも変なことやってないかということで、家にも隠しマイクを置いておく。それを毎回盗聴して、今日は誰と電話してるんやというのを調べるわけです。そういうひどいスパイへの監視を国の命令としてやってたわけです。ソ連にはKGBといういわゆる国家警察があるわけです。共産主義特有のものだというのが、昔の東西冷戦の時の言い方だったんですけどね。権力を一党で握る、そのためには国民を常時監視する必要がある。そのためにはスパイ網を張り巡らせるということをしてた。ところがそこで東西のベルリンの壁が崩れたというのがこの映画です。

(3) ところが実は日本でも、中国に攻めていった時、アメリカと戦争を始めた時、日本では天皇制のもとで国民を監視していた。つまり天皇制反対やとか言ったらえらいことになったわけです。天皇制をもとにして軍国主義を進め、軍備を拡張していった。それが日本の明治、大正、昭和の時代の流れですね。先程日清戦争、日露戦争の話をしました。日本は徳川幕府の時代は侍がチョンマゲを結ってた時代。その当時、中国の清国も辮髪(べんぱつ)の時代ですね。西欧列強が植民地を取ろうとした。中国では上海とか天津とかが取られていったわけです。日本にもアメリカからペルーがやってきた。フランスもやってきて、日本もやばかった。そこで坂本龍馬さんとかが出てきて前向きにヨーロッパの文明を取り入れよう、ちゃんと勉強しよう、海軍をつくろう、日本を統一しようという人たちが頑張って、明治国家ができたわけです。アジアで初めて近代的な国家、日本ができたわけです。1868年に初めて近代的な国家ができた。そして1894年から1895年と日清戦争やって、1904年から1905年と日露戦争、1914年くらいから第一次世界大戦。こういう大きな流れなんですね。日本が初めて中国に攻めていったのが1931年9月18日の柳条湖爆破事件。そして1937年に本格的な中国との戦争が始まった。日清戦争、日露戦争が終わりました。第一次世界大戦で日本は勝つ側にまわりました。そこらあたりから、欧米列強との競争が始まりました。中国に入りました、アメリカやイギリスがいらんことを言うてくる。そこでお前らいらんことを言うな。わしはわしでやるんやということで、日本が戦争へと進んでいったわけです。そしてそれをやるためには、そういうことに反対するやつをみんな潰さなあかん。そこで、ソ連のKGBと同じような秘密警察があったわけです。日本ではそれを特別高等警察といいます。特高と言ってます。どの国でも

軍部の独裁とかはあるわけです。特にアフリカでは、今でもいっぱいあるわけです。2、3日前にチュニジアで革命が起こったとか。ポーランドで起こったとか。権力を握って反対するやつを押さえつけようという勢力は、必ずスパイを使って反対派を全部捕らえる。日本でもそういう時代がありました。今は非常に平和で民主的かつ、ノー天気な国になってるんですけどね。

### <毛先生のまとめとあいさつ>

毛先生) 話としては、映画の話から我々の暮らしの中の話がこの本の中にあるわけです。皆それぞれ感動が違うから、今度はすべての原稿を私の所に統括してしまいますので、その時にまた微調整が必要かと思っています。その時に皆の担当をメモしてますから、もしかしたら聞きに行くかもしれません。このところはもっとこんな風に訳した方が良いのではという意見を求めに行くかもしれません。今日は折角ですので、ご本を持っているので、先生からサインを貰ってください。それから集合写真を撮りたいと思っています。中国で本を作るのに映画にポスターが付くんですね。研究班として共同で訳す作業なので、先生のプロフィールに小さな写真を載せるのですが、その時に皆さんの写真を入れるので、写真を撮ります。翻訳の締め切りは5、6月くらいで仕上げないと時間が間に合わないので、よろしくお願いします。今日は一旦拍手で先生におつかれ様としてください。

以上